

## 16. 柔道教員のパーソナリティ認知構造についての一考察 —パーソナリティ認知構造と授業評価との関連性—

大東文化大学 高橋 進  
講道館 貝瀬 輝夫  
埼玉大学 野瀬 清喜  
鹿屋体育大学 濱田 初幸  
平成国際大学 三宅 仁

## 16. The Structure of Personal Cognition about the Teacher of Judo in University Students

Susumu Takahashi (Daito Bunka University)  
Teruo Kaise (Kodokan)  
Seiki Nose (Saitama University)  
Hatsuyuki Hamada (National Institute of Fitness and Sports in Kanoya)  
Hitoshi Miyake (Heisei International University)

### abstract

The purpose of study was to investigate the following: (1) the structure of personal cognition about the teacher of Judo in university students; (2) the evaluation of personal cognition about the teacher of Judo; (3) the students' evaluations of Judo instruction by Judo teachers; (4) the relationships among the above factors.

The subjects were 69 students who enrolled in U.University. The scales of personal cognition, which were prepared by Hayashi, and other topics, which were prepared by Takahashi, were measured by questionnaire. The data of personal cognition was analyzed by factor analysis techniques. Each factor score was calculated. The relationship between the evaluation of

personal cognition and the evaluation of quality in instruction identified were analyzed by correlation analysis. The results were as follows:

1. 16 male students (23.2%), and 53 female students took part in this reserch. 73.9% of them belonged to the some clubs in university, meaning that they were active and positive in the university life.
2. It was suggested that three personal cognition factors about the teacher of Judo (sincerity with capacity, strong will, and personal familiarity) were extracted from factor analysis. These factors were similar to the three factors which was identified by Hayashi. It was clarified that these personal cognition factors obtained very high scores by the students evaluation.
3. Four factors the evaluation of quality in Judo instruction, such as teacher's interaction, learning enviroment, momentum instruction, and learning behavior, which were identified by Takahashi, obtained very high score.
4. It was clarified that three factors (sincerity with capacity, strong will, and personal familiarity) concerning personal cognition about teacher of Judo had a strong influence on the evaluation of quality in instruction.

## 1 緒言

文部科学省では、初等中等教育局教職員課の発刊しているパンフレット、「魅力ある教員を求めて」<sup>9)</sup>の中で、教員に求められる資質能力を以下のように規定している。

- 教師の仕事に対する強い情熱  
教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感など
- 教育の専門家としての確かな力量  
子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力など
- 総合的な人間力  
豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人間関係能力など

その中で、「総合的な人間力」に含まれる、豊かな人間性や社会性、常識、礼儀作法などは、従来から教員を志望し教職に就くものの資質としては、欠くべからざるものであったことに異論を唱える者はあるまい。改めてこのように規定している理由は、平成18年7月11日、中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度のあり方について（答申）<sup>7)</sup>」の中で詳しく示唆されているが、「教員に対する信頼」のマイナス方向への変化によることに相違はない。

尤も、一部の教員による不祥事は、依然として後を絶たない状況にあり、保護者や国民の厳しい批判の対象となっていることは否めず、所謂教員としての望ましいパーソナリティの再確立の必要性が叫ばれていることも事実である。

ところで、青少年の健康や体力の向上が、国家的な課題である今日にとっては、保健体育教員についても、上述した課題「望ましいパーソナリティの再確立」は急務であることは否めない。平成20年6月30日に行われた、中央教育審議会・スポーツ・青少年分科会・スポーツ振興に関する特別委員会（第10回）議事「（1）スポーツを文化として定着させるために―指導者の観

点から一」<sup>10)</sup>の中で、そのことを物語るかのように、「質の高い体育教師」についての議論がなされた。そして、「スポーツの持つ教育力を考えると、指導者には技術だけではなく品性も必要だと思う」という意見が述べられていることは注目に値する。

望ましいパーソナリティを、ここでは、品性という言葉で表しているが、スポーツを文化足らしめるためには、その指導者、あるいは保健体育教員の望ましいパーソナリティが大きな鍵を握っているということを示唆していることは自明の理である。

では一体、保健体育教員のパーソナリティは如何に認知されているのであろうか。筆者ら<sup>16)</sup>は、それに応えるべく、保健体育免許取得可能大学生を対象に、保健体育教員に対するパーソナリティ認知についての研究を行っているが、保健体育教員のパーソナリティ認知次元を示唆する「力本性」「個人的親しみやすさ」「誠実性」ともに、高い評価を得た。この結果、少なくとも保健体育教員やスポーツ専門職を志す学生の保健体育教員に対するパーソナリティ認知は極めて健全であることが明確になったが、一般論としては、上で挙げた「品性」が問題になっていることも事実であり、その間のパラドキシカルな問題を解明することは大きな課題であることに疑問の余地はない。

さて、体育実技の内容であるが、現行の学習指導要領<sup>5) 6)</sup>では、体育領域が複合的であることは周知のとおりである。スポーツ種目のみではなく、武道やダンスの領域も含まれている。無論、武道、ダンスを専門とする保健体育教員についても、他の領域を担当教授することになるが、その文化性に言及すれば、特に武道については、球技、水泳、陸上競技などの一般スポーツ領域と真部分集合として括られるとは言い難い。2011年から、中学校で武道が必修とされ、その目標の中に「武道の特性や成り立ち、考え方の涵養」という内容が掲げられているが、その特異性を示唆している根拠ともなる。

従って、武道に携わる教員自体の特有のパーソナリティ認知が存在することは明白であろう。しかしながら、「保健体育」の授業の一環として取り上げられ、その目標の中に特異性は存在するものの、保健体育としての一般的な狙いを逸脱してしまうことは許されないことである。武道授業が、望ましい保健体育授業と同様な評価要因の上に構築され、楽しく、生涯に関わる運動として認識されるに至らなければ意味がない。そのように鑑みれば、武道を教授する教員のパーソナリティの特異性も、望ましい保健体育教員のパーソナリティを基盤とした、付加価値的な魅力であるべきであろう。更には、その特異性が、「体育教師」としての「品性」を形成する魅力であることが望まれる。

そこで、本研究では、武道を教授する教員のパーソナリティの特異性を明確化させるために、武道の中で「柔道」を専門とする教員のパーソナリティ認知の解明を試みることにした。但し、既述した「武道授業が、望ましい保健体育授業と同様な評価要因の上に構築され、楽しく、生涯に関わる運動として認識されるに至らなければ意味がない」ということを前提にするために、筆者ら<sup>15)</sup>の研究結果を本研究の指針とした。即ち、取り上げる授業については、柔道に対して望ましい態度、望ましい授業評価を得ることのできた授業形態として構成的グループエンカウンターを導入しての授業を採用した。また、授業実施者は、柔道専門家とし、上記の一連の研究で検証している大学の授業の実施後に、教員のパーソナリティについて、あるいは授業評価についてのアンケート調査を行うこととした。得られた柔道教員のパーソナリティ認知については、因子分析を試み、林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知の基本3次元を基軸とした上で、筆者らが抽出・命名した、保健体育教員のパーソナリティに対する認知構造と比較しその特異性について考察するこ

とした。また、授業評価を高橋ら<sup>17)</sup>の示した要因毎に明らかにするとともに、本研究で得られた柔道教員のパーソナリティ認知評価との因果関係を見ることとした。

いずれにせよ、本研究は、保健体育教員の中で、望ましい柔道（武道）教員のパーソナリティを規定する仮説を立脚することとなろう。

## II 研究方法

### 1. 調査対象者

U大学共通教育・リテラシー教育科目、スポーツと健康〈柔道〉を履修選択した男女学生69名（2クラス分・男女共修）。

### 2. 調査時期

2008年7月授業13コマ最終授業（1コマ90分）。

### 3. 授業計画

筆者らの研究<sup>15)</sup>、「柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について」で用いた指導案（14時間）に、多少修正を加え13時間分として授業を進めた。

### 4. 授業者の教育歴

授業者は、柔道を専門とする大学教授であり、講道館6段、25年の教育歴を有する。

### 5. 調査内容

質問の内容については、以下の項目、尺度から構成した。

#### （1）一般項目（対象者の属性）

所属、氏名、性別、学年、大学でのクラブ活動状況、地域でのクラブ活動状況、志望職種など。

#### （2）受講担当柔道実技教員のパーソナリティ認知を問う項目について

林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知構造に関する研究で明らかにされた、基本次元「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「力本性」が、保健体育教員に対するパーソナリティ認知構造の基軸となると仮定し、その構造を明らかにするために研究を進めた筆者ら<sup>16)</sup>の20の質問項目を採用した。

尚、アンケート上では、「パーソナリティ」ではなく、日常用語として馴染みのある「性格」という用語を用い、「受講した柔道の教員の性格を貴方はどのように感じていますか」という設問に対し20対のパーソナリティ特性用語尺度上に5段階評定で回答を求めることとした。

#### （3）柔道授業の評価を問う項目

「体育授業観察者の評価構造」を明らかにした高橋らの研究<sup>17)</sup>を参考にし、良い体育授業の条件項目として、24項目を採用した筆者ら<sup>16)</sup>の研究と同様、「授業の勢い・6項目」「学習行動・6項目」「教師の相互作用・6項目」「学習環境・6項目」24項目全てを採用することとした。尚、回答は、大変思う「4」、思う「3」、あまり思わない「2」、全く思わない「1」の4件法で求めることとした。

## 6. 調査処理の手順

(1) アンケート項目の「一般項目(対象者の属性)」については、適当な回答に○印を記させた。統計処理については、各項目の頻度並びに%を算出した。

(2) 「受講担当柔道実技教員のパーソナリティ認知」については、その構造を再認する意味から以下の手順で統計処理を行った。

①性格を問う、形容詞対の質問(例・「大変慎重である・5」、「やや慎重である・4」、「どちらでもない・3」、「やや軽率である・2」、「大変軽率である・1」)に対して、5段階評定で回答を求めさせ、それぞれに「5点」～「1点」の得点を付与した。

②「柔道教員の性格に対する20項目」に対して、共通性の推定値を1.0とした主因子解による因子分析を施した(反復推定あり)。

③その結果、固有値1.0以上である因子を抽出した。

④更に得られた因子行列に対して、Normal・Varimax回転を施した。

⑤因子の解釈・命名については、因子負荷量0.4以上の項目を原則として有効とし、林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知の基本3次元を基軸とし、解釈可能な範囲で命名を行った。

⑥解釈・命名可能な因子については、因子平均得点を算出した(因子の個人得点=各因子に含まれる因子負荷量0.4以上の項目のうち因子を代表すると判断できる項目の評定合計得点÷項目数・パーソナリティ認知評価得点)。

(3) 「柔道授業の評価」を問う24項目は、大変思う「4」、思う「3」、あまり思わない「2」、全く思わない「1」の4段階で回答させ、それぞれに得点を付与した。その後、高橋ら<sup>17)</sup>の研究で4分類したそれぞれの因子に含まれる項目の合計得点を項目で除した値を因子の個人得点とし、その因子平均得点を算出した。

(4) 「受講担当柔道実技教員のパーソナリティ認知評価」と「柔道授業の評価」との因果関係を明らかにするために、「パーソナリティ認知構造」尺度(3観点)と「柔道授業評価」(4観点)の2変数間の積率相関係数(ピアソン)を求めた。

尚、本研究全ての計算処理は、SPSSXプログラムによって行われた。

## III 結果と考察

### 1. 調査対象者の属性

調査対象者の属性については、表1～表5に示した。その結果を要約し、若干の考察を加えることとする。

表1には、アンケート対象者の男女数を示した。その結果、男子学生16名(23.2%)、女子学生53名(76.8%)であった。また、対象者の学年は、表2に示したとおり、全て1年生であった(U大学共通教育・リテラシー教育科目、スポーツと健康<柔道>については、1年次開講科目)。

また、表3には、学内の課外クラブ活

表1 対象者の性別

Table1 Sex of students

項	目	frequency	%	cum%
男	性	16	23.2	23.2
女	性	53	76.8	100.0
total		69	100.0	

表2 対象者の学年

Table2 Grade of students

項	目	frequency	%	cum%
第1学年		69	100.0	100.0
total		69	100.0	

動状況を、表4には、地域でのクラブ活動状況を示している。その結果、学内でのクラブ活動参加状況は、73.9%とかなり高く、地域でのクラブ活動参加状況は、13.0%と低値であることが窺えた。本研究では、クラブ活動参加状況の詳細（運動部系、文化部系）を問うことはしなかったが、平成19年度文部科学省白書<sup>8)</sup>によれば、中学生の運動部所属生徒割合が65.0%、高等学校については40.6%であり、本調査対象者の学内課外クラブ参加状況は決して低くないことが示唆された。このことは、本調査対象者が、学習面のみならず、大学生活全般を積極的に過ごそうとしている態度を有していることを如実に物語っている。

ところで、表5に示した卒業後の志望職種であるが、教員志望・50.7%、その他の職種・42.0%と、この授業自体を選択している学生の専攻（教育学部と国際関係学部）が大きく影響したことは言うまでもない。

調査対象者の属性について以上のような結果を得たが、本調査授業時に、他のスポーツ種目も同時に開講され（卓球、テニス、サッカー、バレーボール、柔道等）、調査対象者が、本授業を自ら選択履修したこと、並びに出席率が98%であったことも付記したい。いずれにせよ、本調査対象者は、大学生として健全且つ真摯な態度で授業に参加したことは明白であり、本調査学生から得られたデータについても信頼性が高いものと判断し、以下の考察・検討に進むこととする。

## 2. 柔道教員に対するパーソナリティ認知構造並びに各パーソナリティ認知構造に対する評価

Varimax回転後の抽出因子及び因子負荷量は、表6に示した。この結果、固有値1.0以上の基準で抽出された因子は4因子（表7参照）、そのうち解釈・命名可能な因子は、3因子であった（回転後の貢献度の合計は66.2%、解釈・命名可能な3因子は52.5%であった）。尚、因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は、0.4以上とした。以下、(1)～(4)で各因子の解釈・命名について、(5)で解釈・命名可能な3因子の評価得点について解説する。

(1) 第一因子については、「V4・人のよい—人の悪い」「V5・責任感のある—責任感のない」「V6・心のひろい—心のせまい」「V7・重厚な—軽薄な」「V9・感じのよい—感じの悪い」「V10・親しみやすい—親しみにくい」「V11・親切な—不親切な」「V12・気長な—短気

表3 大学でのクラブ活動状況

Table3 Activity situation of school's Club

項 目	frequency	%	cum%
活動している	51	73.9	73.9
活動していない	18	26.1	100.0
total	69	100.0	

表4 地域でのクラブ活動状況

Table4 Activity situation of region's Club

項 目	frequency	%	cum%
活動している	9	13.0	13.0
活動していない	60	87.0	100.0
total	69	100.0	

表5 志望職種

Table5 Expected occupation

項 目	frequency	%	cum%
中学校保健体育教員	14	20.3	20.3
高等学校保健体育教員	11	15.9	36.2
大学院進学	5	7.3	43.5
大学教員	1	1.5	45
小学校教員	9	13	58
スポーツ指導者	29	42.0	100.0
total	69	100.0	

表6 パーソナリティ認知構造

Table6 Rotated factor loading and naming of factors(personal cognition)

因子	項目	因子負荷量
F1:「包容力を伴った親しみやすさ因子」	V4 人のよい — 人の悪い	0.927
	V5 責任感のある — 責任感のない	0.681
	V6 心のひろい — 心のせまい	0.883
	V7 重厚な — 軽薄な	0.536
	V9 感じのよい — 感じの悪い	0.914
	V10 親しみやすい — 親しみにくい	0.716
	V11 親切な — 不親切な	0.883
	V12 気長な — 短気な	0.582
F2:「力本性因子」	V13 社交的な — 非社交的な	0.718
	V14 意欲的な — 無気力な	0.773
	V15 堂々とした — 卑屈な	0.685
	V16 積極的な — 消極的な	0.687
F3:「社会的望ましき因子」	V1 慎重な — 軽率な	0.681
	V16 積極的な — 消極的な	0.443
	V18 分別のある — 無分別な	0.784
	V19 自信のある — 自信のない	0.566

\*因子負荷量0.4以上の項目を原則として因子の解釈に採用した

な」などの項目に0.4以上の高い因子負荷量を示した。V5並びにV7以外についての6項目は、個人的親しみやすさを示唆する項目であり、林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知の基本3次元のうち「個人的親しみやすさ」因子とほぼ一致する結果となった。また、「V5・責任感がある」「V7・重厚である」という項目は、社

会的望ましさを示すパーソナリティ項目である。即ち、この因子は、個人的な親しみを示しているが、その親しみは、所謂友達関係を指すものではなく、どっしりとしていて何事も受け止めて貰えるような親近感を示唆しているといえよう。従って、この因子を「包容力を伴った親しみやすさ」因子と命名することとした。

(2) 第二因子に含まれる因子負荷量の高い項目は、「V13・社交的な—非社交的な」「V14・意欲的な—無気力な」「V15・堂々とした—卑屈な」「V16・積極的な—消極的な」であった。全ての項目が、所謂活動性を示す項目であり、林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知の基本3次元のうち「力本性」因子とほぼ一致する結果となった。そこで、この因子については、林<sup>1)</sup>に倣って「力本性」因子と解釈・命名することとした。

(3) 第三因子では、「V2・恥ずかしがりやの—恥知らずの」「V8・なまいきでない—なまいきな」「V17・かわいらしい—にこらしい」「V18・分別のある—無分別な」「V19・自信のある—自信のない」「V20・人なつっこい—近づきがたい」の6項目が、0.4以上の因子負荷量を

表7 相関行列の固有値(回転後)

Table7 Eigenvalue of rotated factor matrix

因子	固有値	貢献度	累積貢献度
1	5.267	26.335	26.335
2	3.192	15.958	42.293
3	2.738	13.691	55.984
4	2.035	10.173	66.157

示した。しかし、この因子に含まれる項目の内容は、複合的なパーソナリティ認知を示し、林<sup>1)</sup>の基本3次元のどの因子を基軸としているか判断し難い。従って、敢えてここではこの因子を解釈・命名せず、その後の分析からは除外することとした。

(4) 第4因子に含まれる高い負荷量の項目は、「V1・慎重な—軽率な」「V16・積極的な—消極的な」「V18・分別のある—無分別な」「V19・自信のある—自信のない」の4項目であった。軽率でなく、積極性を持ち、分別を有することは、社会人として望ましい資質を有していることにもなるが、この3項目全てが、林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知の基本3次元のうち「社会的望ましさ」因子に含まれている。自信のあるなしは、力本性を表した項目であるが、上述の項目の内容から解釈し、この因子は「社会的望ましさ」因子と命名することとした。

以上の如く、柔道教員のパーソナリティ認知を示唆する構造を、林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知の基本3次元を基軸として解釈・命名を試みた。その結果、柔道教員のパーソナリティ認知構造（「包容力を伴った親しみやすさ」「力本性」「社会的望ましさ」）については、林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知の基本3次元構造と類似性が高いことが窺えた。その中で、「個人的親しみやすさ」因子に匹敵する、「包容力を伴った親しみやすさ」因子については、全体的には個人的親しみやすさを示唆する因子であるものの、教員として持つべき責任感、あるいは、安心感を彷彿させる重厚感を伴った親しみやすさとして示されたことは意義深い。「教員が親しみやすいことは望ましいことであるが、単なる友達としてではなく、学生を擁護し導く存在である」ことを、調査対象者である学生自身が認知している可能性が否めないからである。また、このパーソナリティ認知が、特に柔道教員に対する特異的な認知であれば、柔道（武道）教員の存在は、学校教育の中で重要な役割を果たすことは明確である。本研究の結果をもって即座に一般化することは危険であろうが、仮説として捉え、今後の研究を進めていくことは意味のあることであり、課題でもあろう。

(5) 解釈・命名した因子の評価得点（因子平均得点）については、表8に示してある。その結果、「包容力を伴った親しみやすさ因子」の得点は、 $4.792 \pm 0.384$ （点）、「力本性因子」は、 $4.826 \pm 0.349$ （点）、並びに「社会的望ましさ因子」の得点は、 $4.594 \pm 0.495$ （点）であった。

以上から、柔道教員のパーソナリティ認知次元を構成する「包容力を伴った親しみやすさ」「力本性」「社会的望ましさ」3観点全てについて、本調査対象者からかなり高い評価を得ていることが支持された。

勿論、この結果は、本調査柔道教員のパーソナリティ自体の評価が反映されたものであることに相違ないが、筆者ら<sup>11) 12) 13) 14)</sup>の柔道に対する学習者の態度に関する一連の研究においても、学習者は柔道の重厚性や、伝統性を強く肯定していることから鑑みれば、柔道あるいは武道の持つ文化性がパーソナリティ認知に影響したことも否めない。また、保健体育教員のパーソナリティ認知構造自体も、筆者ら<sup>16)</sup>の研究で明らかにされたように、林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知の基本3次元構造と類似（「個人的親しみやすさ因子」「力本性因子」「誠実性因子」）しており、それぞれの因子の評価もかなり高い。従って、柔道を専門とする武道教員をはじめとする、保健体育教員のパーソナリティ認知は、元

表8 パーソナリティ認知評価得点

Table8 Factor mean score, SD(personal cognition)

因子名	平均得点	標準偏差
F1:「包容力を伴った親しみやすさ」	4.792	0.384
F2:「力本性」	4.826	0.349
F3:「社会的望ましさ」	4.594	0.495



来高い評価を得ていることも、本研究のパーソナリティ認知の高さを説明する一要因である。

更には、緒言で既述したように、「本研究対象授業が、柔道に対して望ましい態度、望ましい授業評価を得ることのできた授業形態として構成的グループエンカウンターを導入しての授業」であったことも、大いにこの高評価と関係しているであろう。その意味においても、次項における「本調査柔道授業の評価」の解明、並びに「受講担当柔道実技教員のパーソナリティ認知評価」と「柔道授業の評価」との因果関係の解明・検討は筆致となろう。

いずれにせよ、柔道教員のパーソナリティ認知は3観点全てについて高い評価を得ており、望ましい評価が得られたと言える。更に、「個人的親しみやすさ」が、保健体育教員一般に評価される親しみやすさに加えて、包容力のある、あるいは、重厚さを帯びていると捉えられていることも示唆された。このことを、柔道や武道教員の持つパーソナリティ認知の特異性であると仮定することは可能であるが、本研究は限定的な調査であるため、対象あるいは、授業者を広げた研究が課題であり、急務となろう。

### 3. 柔道授業の価値評価

高橋ら<sup>17)</sup>の示した、授業評価4観点(因子)に含まれる項目の合計得点を項目数6で除した4評価得点を算出し、本調査柔道授業に対する評価とすることは、緒言、研究方法で既述したとおりである。

尚、以上の手順で得られた授業評価得点(各因子に含まれる項目についても列記)については表9に示した。その結果、「学習行動」は、 $3.638 \pm 0.381$ (点)、「授業の勢い」は、 $3.597 \pm 0.369$ (点)、「教師の相互作用」は、 $3.734 \pm 0.346$ (点)、「学習環境」は、 $3.196 \pm 0.432$ (点)と、各観点ともかなり高値(4件法・4点から1点を付与)であった。

即ち、本調査柔道授業は、「学習の効率化・合理化」「安全配慮を含む学習環境の整備」「授業者自身の暖かく、分かりやすい働きかけ」並びに「学習者の自主性、積極性、有能感の涵養」全てが、かなり高い水準で達成されていたと、学習者に判断されることとなった。本授業が、学生に受け入れられやすい形態を取っていたことは前述(緒言)したとおりであり、柔道授業に構成的グループエンカウンターを採用することの有効性を再任する結果となった。

表9 授業評価得点

Table9 Factor mean score, SD(evaluation of instruction)

因子名	平均得点	標準偏差
F4:「学習行動」	3.638	0.381
F5:「授業の勢い」	3.597	0.369
F6:「教師の相互作用」	3.734	0.346
F7:「学習環境」	3.196	0.432

### 4. 「受講担当柔道実技教員のパーソナリティ認知評価」と「柔道授業の評価」との因果関係

「パーソナリティ認知構造」尺度(3観点)と「柔道授業評価」(4観点)の2変数間の積率相関係数(ピアソン)を求めた結果を表10に示した。

その結果、「柔道教員のパーソナリティ認知」の内、「力本性」「社会的望ましさ」に対する認知評価が良好なほど、「柔道授業の評価」の全ての4観点について、より望ましい評価を得ていることが窺えた。また、「包容力を伴った親しみやすさ」についても、「学習行動」「教師の相互作用」「学習環境」の3尺度間との有意な相関関係を示した。この結果は、柔道教員が望

表10 パーソナリティ認知と授業評価観点との相関関係

Table10 Correlation between personal cognition and evaluation of instruction

尺度 (変数)	F4:「学習行動」		F5:「授業の勢 い」		F6:「教師の相 互作用」		F7:「学習環境」	
	相 関 係 数	有 意 水 準	相 関 係 数	有 意 水 準	相 関 係 数	有 意 水 準	相 関 係 数	有 意 水 準
F1:「包容力を伴った親しみやすさ」	0.387	**	0.222	N	0.421	**	0.257	*
F2:「力本性」	0.357	**	0.432	**	0.424	**	0.424	**
F3:「社会的望ましさ」	0.255	*	0.389	**	0.399	**	0.366	**

\*・・・相関係数は5%水準で有意

\*\*・・・相関係数は1%水準で有意

N・・・相関係数は有意ではない

ましいパーソナリティ認知を有していると評価されるほど、柔道授業を支える重要な要素についての評価も高くなる可能性を孕んでいることを示唆している。

「各教科に関わる学習を好きになることも、嫌いになることも、それらを担当する教員による」と良く言われているが、以上の結果は、正にそのことを示していると言っても過言ではあるまい。

以上、既述のような結果を得たが、学習者が学習を進めていく上で、「柔道（武道）教員のパーソナリティ構造」あるいは、その「授業評価」が、非常に重要な鍵になるということが明確になった。また、柔道教員特有のパーソナリティ認知スタイルが存在する可能性も示唆された。今後は、本研究で得られた結果を仮説とし、調査対象、あるいは授業者の拡大に努め、より多次元的な角度から研究を進めることとしたい。

#### IV まとめ

本研究では、武道を教授する教員のパーソナリティの特異性を明確化させるために、武道の中で「柔道」を専門とする教員のパーソナリティ認知の解明を試みることを目的とし、柔道教員のパーソナリティについて、あるいは授業評価についてのアンケート調査を行うこととした。得られた柔道教員のパーソナリティ認知については、因子分析を試み、林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知の基本3次元を基軸とした上で、筆者ら<sup>16)</sup>が抽出・命名した、保健体育教員のパーソナリティに対する認知構造と比較し、その特異性について考察することとした。また、授業評価を高橋ら<sup>17)</sup>の示した要因毎に明らかにするとともに、本研究で得られた柔道教員のパーソナリティ認知評価との因果関係を明らかにするために、両尺度間（評価得点）の積率係数（ピアソン）を求めた。結果は、次の如くである。

- (1) 調査対象者69名の内、男子学生は、16名（23.2%）、女子学生は、53名（76.8%）であった。尚、調査対象者の学内でのクラブ活動参加状況は、73.9%とかなり高いことも明確になった。この結果は、調査対象者が、大学生活全般を積極的に過ごそうとしている態度を有していることを示唆している。
- (2) 柔道教員のパーソナリティ認知次元は、「包容力を伴った親しみやすさ」「力本性」「社会的望ましさ」と解釈・命名された。また、その3次元ともに、本調査対象者から高い評

価を得ていることが支持された。尚、これら3次元は、林<sup>1)</sup>のパーソナリティ認知の基本3次元構造と類似性が高いことが示唆された。

- (3) 柔道授業を構成する4要因（「学習行動」「授業の勢い」「学習環境」「教師の相互作用」）の平均因子得点が高く、その評価が高いことが窺えた。
- (4) 柔道教員が望ましいパーソナリティ認知を有していると評価されるほど、柔道授業を支える重要な要素についての評価も高くなることが明確になった。

#### 引用・参考文献

- 1) 林文俊：対人認知構造の基本次元についての一考察，名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），25：233-247，1978.
- 2) 林文俊・大橋正夫・廣岡秀一：暗黙裡の性格観に関する研究（Ⅰ），実験社会心理学研究，19：9-25，1983.
- 3) 林文俊・大橋正夫・廣岡秀一：暗黙裡の性格観に関する研究（Ⅱ）—共通尺度法と個別尺度法の比較検討—，名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），30：1-26，1983.
- 4) 伊藤正信：体育教師像に関する研究（その1）—大学生からみた中・高校の体育教師に対するイメージについて—，香川大学教育学部 研究報告第Ⅰ部 86：17-34，1992.
- 5) 文部科学省：中学校学習指導要領，1998，[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/990301/03122602/008.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301/03122602/008.htm).
- 6) 文部科学省：高等学校学習指導要領，1999，[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/990301d/990301g.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301d/990301g.htm).
- 7) 文部科学省（2006）：今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm).
- 8) 文部科学省：平成19年度 文部科学白書「第8章 スポーツの振興と心身の健やかな発達に向けて」，[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab200701/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200701/index.htm).
- 9) 文部科学省：平成20年度 初等中等教育局教職員課パンフレット「魅力ある教員を求めて」，  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/miryoku/03072301/001.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301/001.pdf).
- 10) 文部科学省：平成20年6月30日 中央教育審議会・スポーツ・青少年分科会・スポーツ振興に関する特別委員会（第10回）議事「（1）スポーツを文化として定着させるために—指導者の観点から—」，[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo5/006/gijiroku/08072319.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/006/gijiroku/08072319.htm).
- 11) 高橋進・矢野勝：柔道に対する中学生の態度構造について，関東学園大学紀要，14：137-144，1988.
- 12) 高橋進・矢野勝・磯村元信：柔道に対する女子高校生の態度構造—男子高校生との比較から—，関東学園大学紀要，16：109-115，1989.
- 13) 高橋進・貝瀬輝夫・菅原正明・矢野勝・森藤才・若林眞：大学生と高校生の柔道に対する態度の差異について—認知的側面と感情的側面の比較—，武道学研究，22-1：33-44，1989.
- 14) 高橋進・高瀬博：柔道授業における高校生の態度変容について—学習ノートを使用した場合—，群馬栃木保健体育学研究，12：9-18，1993.
- 15) 高橋進・武内政幸・矢野勝・三宅仁・若山英央：柔道授業に構成的グループエンカウンターを導入した場合の効果について（第2報）—授業評価観点と態度との関係—，大東文化大学紀要（社会科学

- 学) , 46 : 169-185, 2008.
- 16) 高橋進・濱田初幸：大学生の保健体育教員に対するパーソナリティ認知について—保健体育免許状取得可能大学生の場合—, 大東文化大学紀要（社会科学）, 47, 2009発刊予定.
- 17) 高橋建夫・長谷川悦示・日野克博・浦井孝夫：体育授業観察チェックリスト作成の試み—観察者の評価観点の構造を手がかりに—, 体育学研究, 41 : 181-191, 1996.